

「広島原爆記念日に」

2014年08月06日

今日、6日は広島に原爆が落とされた日である。一発の爆弾で、4ヶ月以内に15万人もの方が亡くなったと言われている。無残に殺されていった。生き残った人々も原爆の後遺症に苦しみ、また、発症を恐れながら過ごしてきた。毎年、新たな原爆死没者の名簿が慰霊碑に納められている。原爆資料館に展示されている遺品や写真、そして広島市内の模型パノラマと頭上の火の玉は、原爆が「悪魔の爆弾」であることを訴えている。原爆投下の経緯については検証、論争され、また、被爆の惨劇についても多くの報告がなされている。しかし、原爆の廃棄には至っていない。逆に、核不拡散条約があるにもかかわらず、自国防衛のため、また国際的発言力を高めるために原爆製造は止まらず、広がり続けている。力に頼ろうとする人間の罪深さと愚かさを思う。

一人の少年の「校庭で砂を握りしめる」という作文を思い起こす。少年の両親は焼け死んだ。誰が誰か分からない死体を校庭に集め、油をかけて火葬した。少年は自分が握りしめている砂の中に両親の灰があるのではないかと、繰り返し校庭の砂を握りしめると書いていた。惨たらしい死と両親を慕う少年の悲しさに誰が責任を負うのか。被爆者の死は贖罪的な意味を持つ死ではないか。人間の罪を負って亡くなられたと認識する時、その死は私と関わり、私にも責任がある問題として捉えられる。

小学生の頃、学校で引率され、沖縄戦や、広島、長崎の被爆の映画を観た。悲惨な戦争を知った。日本が受けた大きな被害を知らされたが、アジア・太平洋戦争の実態の認識は、全くなかった。大人になって本を通して、日本は被害を受けたけれども、アジアを中心に他国に対して、計り知れないほどの加害者であった事実を知った。被害者から加害者への認識の転換は、私の物の見方を変えた。まず「憲法9条」の武器の不保持と戦争の放棄が得心できた。以来、戦争責任を負うこと、平和を追い求めることが私の願いになった。

日本基督教団は1967年のイースターに、教団議長・鈴木正久牧師の名で「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（以下—戦責告白）」を出した。教団の名において、戦争に協力したことへの罪責と平和への新たな決意が表明されている。1930年から1968年までの教会資料を集めた『日本基督教団資料集』が出版された。これを読めば、証拠文書として、1941年の教団合同以来、戦争協力を内外に向かって呼びかけ、実行したことが、隠しようもなく明らかになる。当時、生活綱領を次のように規定している。「一 皇国ノ道ニ従ヒテ信仰ニ徹シ各其ノ分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ 二 誠実ニ教義ヲ奉ジ主日ヲ守リ公礼拝ニ与リ聖餐ニ陪シ教会ニ対スル義務ニ服スベシ」。驚くべきことに、教会の信仰、礼拝、教義より、天皇に従う皇国史観を優先させている。この生活綱領からも分かるように、戦時中、教会は、モーセの十戒の第一戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」をないがしろにし、天皇を戴く、軍国主義の流れに飲み込まれてしまったとしか言いようがない。罪を認め、悔い改めることは大きな苦しみであり、何より勇気があるが、罪責が告白されるところに、他者との和解が生まれ、自らも新たにされていく。私は、戦責告白が出された1967年に神学校を卒業し、伝道者になった。戦責告白に立って牧師を務めてきた。それが、被爆者の贖罪的な死と関わり得る道であり、明日の平和を実現していくと信じたからである。